◇極め人に聴く◇21

先人の想いと鉛筆艦船画

鉛筆艦船画家
アートスタジオ楓　代表
菅野（すがの）　泰紀（ひろゆき）

菅野　泰紀 氏

聞き手
室舘（むろだて）　勲（いさお）
（株式会社 潮流社
代表取締役社長）

――菅野さんは、鉛筆艦船画家として、軍艦を中心とした艦船を鉛筆で描き、その艦船と縁の深い神社へと奉納する活動をされていらっしゃいます。現在は、靖國神社・遊就館と記念艦「三笠」にて作品展示会「大観艦式二六八二 濤声は凱歌の残響」を開催されています（遊就館は8月31日まで、三笠は9月11日まで開催）。そのような活動に至った経緯と想いをお伺いしたいです。お生まれはどちらですか。

菅野　1982年に岡山県に生まれました。父はもともと、加計学園の教員をしていたのですが、私が3歳のとき、父が失明をしてしまいます。父は教員は続けられないということで、辞表を提出しましたが、加計学園創始者・加計勉先生に引き止められまして、加計先生のご指示で広島県の研修施設の運営を任されることになりました。なので私も3歳のころに、父親の転勤で広島県の双三郡三和町（現・三次市）に引っ越しました。

そして広島県の小学校に通い始めます。ご存知かもしれませんが、広島のいわゆる「平和学習」の偏りはすごいものがありました。学校に日章旗がかかることはなく、音楽の教科書の「君が代」の上から校歌のプリントを貼らされました。夏休みの登校日は8月6日周辺で、原爆や戦争に関する教育を受けました。平和集会では「戦争反対」「反戦平和」といったスピーチを聞いたりしました。否が応でも「戦争」「反戦」に触れる機会の多い環境でした。

――いわゆる「平和教育」の中で育った。

菅野　しかし私は周りとは少し違っていました。幼少期から船が好きでして、父から戦艦「大和」の話を聞くのが好きでした。父が、見えない目で大和の絵を描いてくれたことも印象的でした。たくさんの兵士が乗り込んで戦ったけど、最後は沈んでしまって多くの人が死んでしまったと聞きました。そうした中で、戦争の歴史に興味を惹かれ、なぜ原爆が開発されて広島に落とされてしまったのかなどに疑問を持つようにもなりました。学年が上がり活字を読めるようになってからは「太

平洋戦争史」を読み、写真に写る船にも興味がわき、船の名前を覚える中で漢字も覚えました。

決定的に私の歴史観を形成したのは、小学校6年生の時、「戦争体験者に話を聞いてくる」という課題でした。教師にとって「原爆の被爆者に当時の話を聞いて『戦争は悪だ』と結論づける」ことが狙いだったようです。

そこで私の父の薦めもあり、祖父に話を聞くことにしました。祖父は陸軍の生き残りで当時指揮官クラスだったそうです。その祖父に話を聞くことになりました。今まで祖父とそんな話をしたことがなかったので、とても新鮮でした。中国に行ったり、南方に行ったり、フィリピンでマッカーサーを追い出したあとの施設占領に立ち会ったり、という話を聞きました。

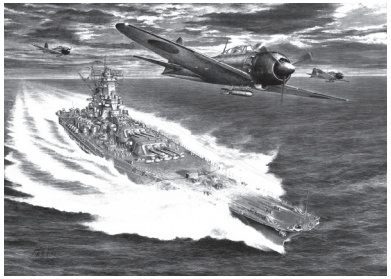
その中では死にかけた経験を何度もしたそうです。南方へ向かう時に当初乗る予定だった船が沈んだとか。現地で食料を調達していて食べてはいけないものを皆で食べて部隊が全滅しかけたとか。戦闘でもすんでのところで生き残り、隣の兵士は死んでしまったとか。撤退時には、負傷兵を連れて行けず、置き去りにしたとか。戦犯裁判にかけられて、死刑判決を受け、執行前に証拠不十分で釈放されたとか。そういった、たくさんの壮絶な話を聞きました。

――それは壮絶な話でしたね。

菅野　平和学習で聞いていた戦争のイメージとは全く変わりました。兵士も皆、必死で生きようとしていたのです。学校ではとにかく「戦争は悪だ、悲惨だ」と伝えるけれども、私は子どもながらに自分のじいちゃんを悪人だとは思えませんでした。一方で、大阪大空襲を経験していた祖母からは、民間人としての戦争の悲惨さも聞きました。私の戦争に関する歴史観は、広島という土地柄と、父、祖父と祖母といった複数の視点の話を聞く中で醸成されたと思います。その意味で周りとは少し違いました。

――当時から絵を描くのが好きだったのですか。

菅野　父が、見えない目で大和を描いてくれたことがきっかけで、その入口から「船を描く」という印象が強く残っています。



「菊水2605 ー戦艦 大和 & 零戦52型甲ー」

ずっと船が好きで、当時プラモデルを買いに行けば、友人たちにはミニ四駆が人気でしたが、私だけは軍艦のプラモデル「ニチモ 30センチシリーズ」に熱中していました。その箱絵がかっこよくて収集したり、その絵を真似して軍艦の絵を絵の具で描いたりしていました。これが自分で艦船画を描きたい、と思った原点です。

中学・高校は音楽に熱中しましたが、再び絵を描きたいと思ったのは広島大学在学中の頃です。クルマや、オリジナルの漫画を描いたりしていました。当時、考古学専攻で「船」の歴史を研究していて、人間にとって船は、数千年前から重要な役割を担っていたことを知りました。小さな船も大きな船も含め、乗って移動する、物を運ぶ、外交や貿易にも欠かせない、など、人類と船の関係性に

強く惹かれました。

――船の魅力に深く心惹かれたわけですね。

菅野　その後、名古屋大学大学院へと進学したのですが、母が体調を崩したことがきっかけで、家業を継ぐことになりました。不動産関連の事業で、インテリアデザインを学ぶ中で、室内のイメージを手書きで描く際の遠近法「パース」を学びました。これが今の、艦船画を描く基礎技術につながっています。

――そうした基礎技術が今の絵に活きているのですね。

菅野　画材としての鉛筆の魅力も感じて、自分でかっこ良い絵を描いて飾りたいと思いました。昔から好きだった戦艦を描こうとして模写したのが、鉛筆艦船画の最初の一枚となる戦艦「攝津」です。艦船画を描くにあたって、主題となる艦船の生涯を調べるわけです。一隻一隻に歴史があるし、時代背景もドラマがある。建造時の技術者と軍部のせめぎあいもある。日本を守るため、欧米列強に追いつくためにどうすればいいかと必死になっていた海軍関係者や技術者、運用する人たちの心の内を知ることにもなりました。日本の艦船の歴史は、日本の歴史、先人たちの歴史だと感じたのです。それがきっかけで、様々な艦船画を描いていくことに熱中していきます。

――艦船の歴史は日本の歴史であると。

菅野　どうせ絵を描くなら、何かに貢献できないかなと思っていたら、縁あって展示会をすることになりました。そこで原画が4枚売れました。そこから依頼を受けることも増えました。

ある時、靖國神社を紹介していただき、みたままつりの揮毫雪洞に絵を描くことになりました。一生懸命描いたら、神職さんからも評判が良くて、これが絵を奉納するという発想になったきっかけです。

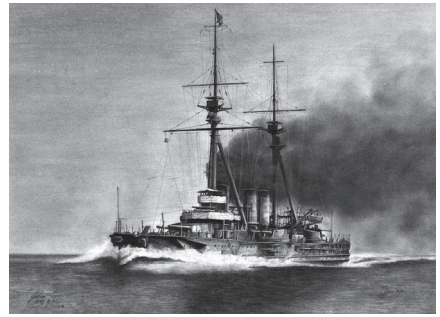
その後、久野潤先生と出会い、「艦内神社」の発想をいただきました。日本人は船の航海の安全を祈るために艦内に神棚を設け、そこに神社から分霊するという風習があります。沈んでしまった艦船たちにも艦内神社があり、その分霊元神社で慰霊と顕彰のための神事ができるのでは、という発想に至りました。鉛筆艦船画、艦内神社、奉納。これらが結びついていきました。こうして、日本海軍艦艇や海上自衛隊の艦艇を鉛筆艦船画として描き、艦内神社の分霊元である神社や、縁のある神社に奉納する。こうした活動が続きました。

「第一艦隊進撃図 2565.5.27」

作品も多くなり、展示会をしてそこで講演もさせていただく機会も増えました。ハワイの戦艦ミズーリでの展示にも繋がりました。日米両国の健闘を称えるとともに、日本の艦内神社という伝統を知ってもらうためです。

――菅野先生の絵の魅力は、鉛筆で描いたことですね。観た瞬間の驚き、絵の美しさ、写真ではありえない構図などから伝わるものが多くあります。写真や動画とは違う魅力があり、幅広い世代間の架け橋になると思います。

菅野　モノクロだからこそ、鑑賞者の想像力を掻き立てます。観た人が風景の色彩や、乗組員たちの背景を想像し、一層の感動を生む



「眞鐵の艨艟 ―戦艦 攝津 2572―」

と思います。また、鉛筆という画材の持つ金属的な質感が、軍艦の重量感や鋼鉄の質感の表現にも適していると感じています。

――さらに、菅野さんの絵からは、船そのものの魅力や船への愛情を感じます。菅野さんの絵は船にとって一番良い状態を表現されていて、船が喜んでいるように見えます。

菅野　最もかっこいい、誇り高い構図、様子を絵に納めたいと思って描いています。世のマスコミも含めて、こと戦争においては、苦しいことを表現しなければならないような空気を感じています。「船が沈む瞬間を描いたほうがいいのでは」「戦争の悲劇を伝える絵じゃなければならない」などと言う人すらいます。しかし、例えば人が亡くなった時に、苦しんでいる写真を遺影に使う人はいません。英霊たち、そこにいた乗組員たちが、誇り高く思えるかっこいいシーンを絵にすることが、彼らの慰霊顕彰にもつながると思います。乗組員や英霊、そのご家族のためにも、最もかっこいい船の姿、魅力的な船の姿を表現したいと心がけています。

――最後に、読者にメッセージをお願いします。

菅野　なぜ私が絵を描くのかというと、先人たちの想いをつなぐためです。自分たちが生きているこの日本。なぜ今、この日本で生きていられるのか。それは先祖の努力、血がにじむ努力があって日本が残っているからです。そのことを絵を通して伝えたいと感じています。

展示会などでは、戦争について考えもしなかった人たちが、年齢・性別を問わず、じっくり絵を観てくださって、考え、想いを巡らせてくれています。私の絵から、何かを感じて、活かしてもらえたら嬉しいです。

一方で、戦後のマスコミや教育現場というのは、英霊や戦争の犠牲者たちを「悲劇を伝える道具」にしていると感じます。そういった風潮が、戦後を生き残った人たちの罪悪感を助長させ、経験を後世に伝えることを阻害してきたと思います。

後世に生きる我々は、そういった空気を打開して、英霊や犠牲者たちが清らかに、安らかに眠られるようにお祈りすること。そして生き残った方々も胸を張って全うしてもらえるような日本の空気になって欲しいと思います。その一助になればと思い、これからも筆を進めたいと思います。

――ありがとうございました。

■すがの・ひろゆき■

1982年　岡山県生まれ
2005年　広島大学文学部を卒業
2006年　家業を継ぐため、名古屋大学大学院を中退
2010年　自身初の鉛筆艦船画となる戦艦「攝津」を制作

現在、作品展示会「大観艦式 二六八二 濤声は凱歌の残響」を開催中。（靖國神社・遊就館では8月31日まで、記念艦「三笠」では9月11日まで）